

硯

二の丸御殿跡からは 13 個の硯が発見され、そのうち 2 個は完全な形で残っていた。硯は、御殿の行政庁舎で働く書記の人たちが使っていたものと思われる。

硯は、中国では古くから使われており、日本には 4 世紀頃に大陸から文字が伝来した際に渡来したと考えられている。8 世紀の『日本書紀』や 1002 年に完成した清少納言の『枕草子』など、古典にも硯の記述が見られる。

徳川時代（1603-1867）には、現代と同じように、藩政を成功へと導くために文書による記録が重要視された。徳川幕府が 2 世紀以上にわたって藩政を維持できたのは、租税や収穫物に関する膨大な記録の蓄積があったからである。